



Title	カリスマの死-真理実行会の事例-
Author(s)	孝本, 貢
Citation	明治大学教養論集, 139: (1)-(20)
URL	http://hdl.handle.net/10291/8831
Rights	
Issue Date	1980-12-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

カリスマの死

—真理実行会の事例—

孝 本 貢

は じ め に

カリスマの特質とその後継者の選出の類型についての研究は、周知のように M. ウェーバーの研究がある。このウェーバーの研究は支配関係の諸類型のひとつの類型として提示したものである。カリスマ的支配は、特殊非日常的な性格をもち、個人的資質のカリスマの妥当性と、その証しとによって厳に個人的に結合された社会関係をなしているものとして捉え、それが永続的な関係の性格をもってくることを日常化として把握している。日常化はカリスマの担い手であるカリスマ保持者の死に遭遇し、その後継者問題が発生したとき、典型的な形で現実の問題となると主張している。⁽¹⁾

このようなウェーバーのカリスマと、その日常化は宗教集団の発生と、その制度化過程のなかで典型的に捉えられ、事実、日本の新宗教においても跡付けることができる。しかし、視点を宗教運動の展開過程に移すと、日本の新宗教に限ってみても、カリスマ保持者としての教祖の死後においても、宗教運動としては継承されていくか、あるいは新たな宗教運動を目差して展開されていく場合が少なくない。例えば、神道徳光教会からひとのみち教団へ、さらにパーフェクトリパティー教団へと展過していく場合、また創価学会における戸田城聖から池田大作への受け継がれるなかでの折伏運動、政治への進出にみられる

運動などが挙げられる。そこでカリスマ保持者としての教祖と、その後継者の選出の問題も宗教運動の展開過程のなかで把握する必要もでてこよう。

ところで、宗教運動の展開過程のなかでカリスマ保持者としての教祖は、その運動のリーダーとして位置付けられる。ここでの宗教運動とは、カリスマの提示する世界観を現実社会に実体化することを目標とする運動である。カリスマ保持者としての教祖がその宗教運動のリーダーとしての地位を獲得しえるのは、世界観の提示者であることに加えて、非日常的な力をもった、いわば神から遣わされた者であり、それがカリスマの証しによってたえず確証されるからである。リーダーとフォロアーの関係はウェーバーの述べているごとく、全人格的な帰依である。⁽²⁾

そこで後継者選出の問題は、ひとつにはリーダーを失なった段階でカリスマ保持者としての教祖の提示した世界観を、いかなる方向で展開するかをめぐっての側面と、またひとつにはカリスマ的資質の保持者、あるいは継承者としての正当性をいかに獲得し、リーダーとしての地位をフォロアー、教団より認証されるかの側面に分けることができよう。この両者はカリスマ保持者としての教祖の死後、その教祖を宗教運動展開のなかでいかに位置付けるかによって規定されるであろう。

ここでは石川県金沢市に本部がある真理実行会（真理実行の教）を事例にとり、上述の問題を検討することにしたい。後述するように真理実行会の教祖は霊能力による啓示ということが最も強調されていた。そこで全ての新宗教運動に適應されるものでなく、そうした性格をもつ宗教運動のひとつの事例研究であることを前もってことわっておく。⁽³⁾

I 真理実行会

1. 今日の教団概要

真理実行会は、昭和22年に財団法人として教祖本城千代子によって結成された。本城千代子は昭和32年に昇天し、昭和36年に妹直野正子が後継者となり、新たに宗教法人真理実行の教が結成され、今日では財団法人真理実行会と宗教

法人真理実行の教の2つの組織がある。構成員は重なっている。真理実行会は青少年育成という目的をもち、青少年研修センターとしての真理実行会館を活動の場として、機関誌『なろっぶ』を発行し、林間学校、その他父母との交流などを主に行っている。その他に財政面での安定化のために、貸館事業、カレンダーの販売などを行っている。一方、真理実行の教においては、月刊紙『緑風』を発行し、春（3月18日）、秋（8月18日）に大祭を執行し、その他に、毎月第1日曜日に研修会を本部で開き、各地の支部で座談会を行なっている。真理実行会と真理実行の教の間の位置付けは、真理実行の教が「親」で、真理実行会が「子」であり、真理実行の教が母体となって真理実行が生み出されたと今日では説明されている。

教勢は昭和25年頃から本城千代子が昇天した昭和32年頃まで急速に伸び、北陸、関東、東海、関西、中国、北海道地方へと拡がっていった。しかし、その後多くの信者が会から離れ、今日では北陸、東海地方を中心とした小教団となっている。

2. 教祖本城千代子とその教え

本城千代子は金沢市で鑄造工場、菓子製造業を営んでいた四十万六太郎の長女として、明治35年に生まれた。生来病弱で両親につれられ、また1人で神仏への参詣、加持祈禱に参加するなどをしていた。22歳の時に農業技師本城亮吉と結婚したが、長男の出生後も病弱で、特に子宮外妊娠で医師から見離された。そうしたことから、ひとのみち教団に入会するなど宗教遍歴を重ねていた。

昭和9年にひとのみち教団の友人にさそわれ、当時雑誌『主婦の友』（昭和6年11月号）に「神か？人か？活殺自在の靈力者！！長洲の生神様松下翁を訪ふ」という記事が取りあげられ、そうした世界で知られていた熊本県玉名郡長洲町⁽⁴⁾上沖洲に住む松下松蔵を訪問した。この松下松蔵との出会いが以降の本城千代子の宗教運動を規定づけた。

松下松蔵より本城千代子の病気は「貴女の体は病ではない。貴女は世を救い、人を救う使命を、神から授かって来て居るのですぞ。そして神様の御心である忠、孝、敬神、崇祖を世の人に知らしめ、行わしめる役割を持って来て居る

のですぞ。病気だと思っ居るのは、それを悟らぬための神の障りです」といわれ、松下松蔵の元に滞在し、修行して「実行とは日常生活にあり」と悟ったと伝えられている。⁽⁵⁾

この時以降、本城千代子は松下松蔵をたびたび訪問し、特に松下松蔵が昭和19年に病気になってからは、毎月10日程ずつ半年ぐらい看病に行っている。一方、金沢の自宅では松下松蔵の教えにもとづき、白木の神殿を造り、また白木の位牌に先祖の俗名を書き祭祀している。そして、昭和10年5月に神殿でお祈りしている時に、「まずしくも心のたから身にませば、神のめぐみのかわりならん」という神示をうけ、それ以降霊能力を獲得した。そして、5カ年計画で春秋2回1週間の予定で、歴代御陵参拝を行ない、また年に1度は伊勢神宮、出雲大社に参拝している。このような行動は松下松蔵においてはみられない。松下松蔵は自己の教を当時の政府の要人に伝えるために上京している以外ほとんど自宅で教を拡めていた。この松下松蔵との違いが、本城千代子をより国家体制へ引きつけて教を実践していくという形で表出していったと考えられる。昭和12年には本城千代子の霊能力を頼って人々が集まり出し、教団の萌芽が生まれる。第1回の大祭が同年3月18日に参列者がわずか2人で執行されている。(『生命』134, 昭38)その後、太平洋戦争開戦の予言、金沢市が空襲に合わないことの予言、敗戦の予言などをし、それがカリスマの証しとして受け入れられている。また戦争中小磯内閣総理大臣を訪問し、終戦を早くするよう訴えるなど対社会活動を行なっている。

敗戦後、「陛下のお歎きを心せよ。親の悲しみを見るとき共に歎いてなんとする。そのお歎きの早く去る様心掛けよ。親を慰めまいらせてこそ、忠孝の道ではないでしょうか。国民は今こそ魂に鞭打ち、磨きをかけて、新日本の建設に努力せねばなりません」、さらに「この泥沼生活にあえぐ人々を、より正しい道に救い上げる事こそ、神の使徒たる自分に与えられた使命である」と自認し、積極的に布教活動、修行生活に励んでいる。昭和21年3月に伊勢神宮に参拝し、そこで「屍は野にさらすともとこしえに 行きてひろめん神の御旨を」という神示を受け、さらに翌22年には「天の岩戸はどこでもない ここから開

ける」という神示を受けて、同年11月1日に財団法人真理実行会が発会した。この年の11月12日には本城千代子を宗教的に開示させ、本城千代子が祖神様と崇めていた松下松蔵が昇天しており、その教えの正統な継承者として新たに組織化を図ったと思われる。

本城千代子が金沢市を中心に知られるようになったのは、当時急激に勢力を伸ばし、天変地異の予言で賑わしていた靈光尊の予言を否定したことが新聞に取りあげられ、そして靈光尊の予言がはずれたこと、金沢市内の百貨店で「宗教展」が開かれ、そこに「本城千代子」と題して参加したことなどからである。

宗教法人ではなく、財団法人として結成した根拠は不明である。当初どちらにするかで議論があり、本城千代子によって決定されたと説明している。しかし、本城千代子の教えが「日常生活こそ真行なり」を核心にすえ、敗戦後のアノミー状況を道徳的に立て直すことを運動目標にしていたからであると考えうる。それは発会式での本城千代子の挨拶より窺える。

(前略) 思うに終戦後国内の現状をみまするに物質の不足とインフレのため、あたかも大海で目標を失った小舟のごとく信念を失い、道徳心は全く地におちた形であります。それでは国家の前途を憂えるべきものがあると思う時、私は寒心にたえない次第であります。この混とんたる世を救うにはお互に神の存在を知り、人間生存の意義を自覚し、新日本建設のため世界平和のため、この真理実行会の発展をはかることが一番大切なことと存じます。

(『真理実行会報』15号、昭23・8)

その具体的生活実践としては、

真行とは忠、孝、敬神、崇祖を現実生活に実行することである。即ち、真理実行である。真行は日常生活を離れたものであってはならない。人里離れたの修業的精神を安静にし得ても、神の意志の実現に何等参画し得ぬ。(同上)

と、忠、孝、敬神、崇祖＝四大道の実践であり、それは社会生活を離れてはありえないものであると説いている。また現実生活のなかでの実践を重視するこ

とは、既成宗教は現実生活から遊離しているという現実認識に基づいている。そこで宗教とは区別しようと意識していたと思われる。このような既成宗教観は新宗教一般に窺えるものである。さらにここでの日常生活実践の強調は本城千代子が以前加入していた「ひとのみち教団」の影響であると考えうる。

教義は松下松蔵の教えを基本としており、それに本城千代子の宗教体験から導き出されたものを加えているといえる。すなわち、宇宙大自然の創造の根源的力を神とし、その神は「無限の気であり、無限の力、無限の生命、無限の愛」であり、全てを創造し、支配しているものとしてとらえる⁽⁸⁾。祭神の中心にこの「宇宙創造之大神」を祭祀し、右に「天照大神」、左に「大国主之神」、「氏神」を祭祀する。これに対して、松下松蔵の場合には、天津神としての宇宙創造の男女二柱の神が万物を創造し、この二柱の神が最初に生んだ神が国津神で、それは造化の四神、天御中主之神、高皇産靈之神、神皇産靈之神、水神御中主之神である。これらは記紀神話からはずれた神観念をもって解釈されている⁽⁹⁾。本城千代子においては、その宗教的世界観の形成過程で伊勢神宮、出雲大社を重視していたために、より天皇制国家における既成の神観念に引きつけられているといえる。それが一方では戦後のアノミー状況の中で、忠、孝、敬神、崇祖が天皇制国家体制の再確立を志向する運動に向ったといえる。

さらに人間はその生命の基を宇宙創造の神より造くられ、肉体は先祖より引き続き親を通じて継承されていると説明する。そして「親の因縁は子に孫にと代々果を結んでゆき限りがない。生活に苦しみ、或は、病患にわずらはされているのは、祖先の因縁、或は自己の精神の至らぬこと、或は、不合理な生活の結果である⁽¹⁰⁾」と、先祖からの因縁の継承を不幸の説明原理としている。そこで先祖祭祀（孝、崇祖）が重視されている。

- ① 先祖祭祀は決して他人にやってもらうのではなく、子孫自ら実行すべきものです。
- ② 先祖の位牌には必ず本名を書くべきもので、たとえ筆下手な人であっても、一家の戸主自ら筆をとって書くのが当然です。
- ③ 先祖は初代（分家した場合の初代を意味するのではなく、血統的に見た

数百千年先の大元の先祖を意味します)より、先祖代々、祖父母、父母、妻子に至るまで亡くなった方を洩れなく祭らねばなりません。

- ④ 養子、妻の実家も、先祖代々として、一括して祭らねばなりません。
〔『生命』58, 昭31〕

さらに、位牌の並べ方も初代先祖、先祖代々、養子の実家の先祖代々、祖父母、父母、妻子、妻の実家の先祖代々と細かく規定して、その祭祀の形式を重んじ、それに違ふと不幸をもたらした事例が多く報告されている。ここには家先祖祭祀の原理を中心としながらも、先祖祭祀を重視する新宗教一般にみられるように自らの先祖は自らで祭祀すること、血縁を重んじているがゆえに双系の先祖をも祭祀することになっている。

以上のことから、四大道の位置付けは以下のように説明される。生命の根源的創造主たる神に対する敬神、生命、特に肉体は父母よりうけたもので、それはさらに先祖にさかのぼるものとして、孝、崇祖、この生命は中心より分れた分霊であり、この中心が国家社会の中心としての天皇であり、それへの忠として位置付けられている。〔『生命』16, 昭27〕

本城千代子は教義世界のなかでは、神の力を仲介し、人間の魂を清め、苦悩の根源を掃い、精神的、肉体的病患を除去する神の使徒であると位置付けている。神の使徒であるというカリスマ保持の証しは「お手数」という秘儀によって行なわれる。「お手数」は以下のように意味づけられている。

人間の悩み、迷いは、悪しき因縁の結果、或は、魂の穢れによるものである。先祖の犯した罪業の因縁を背負った苦しみ、或は自己の犯した罪の報いに病み、又、生霊、死霊に憑れて日夜の責苦に泣き、更に、祖先の祀りを怠り、その障りを受けて、精神的、肉体的に悩み苦しむのである。人間の苦悩は、正しく生かしめんとする神の愛の警告であり、或は、又祖先の知らせである。而して、神、祖先は正しき道に目覚めせしめる、真理実行の誓い、因縁清算に努力する時、苦悩を去らせ給うのである。神の作用は自覚せる者に、直接に働きかけるものである。

お手数とは、目覚めたる人々に、神が特殊な恵みを注ぎ給うを、本城女史

が仲介するものである。悩める人自身の心からの願いと、私心を去り神にすがり切る白紙の精神と、神の御旨実現には積極的な献身を惜しまぬ決意があれば、本城女史の仲介により、神の気は人の魂を清め、苦悩の根源を掃い、精神的、肉体的の苦痛病患を除去し給う。⁽¹¹⁾

「お手数」は神の力を知らせる方便であるとともに、人間の使命を悟らせるためにあると説いている。具体的儀礼は、神殿を正面にして本城千代子が右向きに座り、本城千代子の前で信者が苦悩についての願いをするのが一般的である。その他に緊急の場合などは電話、電報でも行なわれる。これらに対して本城千代子は短い言葉で抽象的な生き方を説いたようである。それを信者が解釈して生きる指針にしていた。「お手数」の内容は多岐にわたっている。『生命』49号(昭30)にそのタイプを11に分けている。そこでは、①天候、気象に関するもの、②水害や火災に関するもの、③国際問題に関するもの、④国民思想に関するもの、⑤事業の運営に関するもの、⑥嫁と姑など家庭問題に関するもの、⑦つきものに関するもの、⑧牛馬の治癒、農作物の病害に関するもの、⑨自己の悪癖などに関するもの、⑩病氣治癒に関するもの、⑪その他を挙げている。

II 宗教運動としての展開

前述したように真理実行会は財団法人として結成された。結成時に作成された「綱領」は次のようなものである。

神の存在を知り、広く世に之を知らしめ、忠、孝、敬神、崇祖を基とし、大自然の真理に従ひ、この魂を磨き、人間本来の使命達成に邁進す。この具体的な実行内容は「実行の誓い」、「吾等の信条」として掲げている。「実行の誓い」においては、「生命の基は神にあり、肉体の基は先祖、親にあり。私は神、先祖、親の喜び給ふ日々を過すことを実行させて戴きます」にはじまり、感謝、敬う、愛、社会のために働くなど、いわゆる通俗道徳からなる10項目を掲げている。しかし、この段階にとどまるかぎりでは社会運動として展開する質を持ちえないものである。社会に対していかにコミットするべきかは「吾等の信条」として提示している。

- 一 吾等は宇宙万物を創造し生かしめ給う神の存在を信じます。
- 一 吾等は忠、孝、敬神、崇祖の四大道を日常生活に実行することが、神の御旨に副う所以であることを信じます。
- 一 吾等は本城先生を奉じて新日本建設と世界平和の実現に邁進することが、吾等の使命であることを信じます。

四大道を実現目標とした「新日本建設」のための運動が具体的に展開されていくのは昭和25年以降である。それは教勢の伸びによってさまざまな社会層の加入をみた帰結である。そこで教勢の伸びを跡付けることにする。

真理実行会は地域別の支部組織を中心においている。そして県段階では県本部を、また支部の下部組織として支所を置いている。最初につくられた支部は戦前に本城千代子の夫の勤務地であった飯田支部（現珠洲市）である。それは昭和22年11月のことである。それ以降北陸地方に教勢は伸び、さらに昭和25年には東京に進出している。この時期に組織が確固たるものとして確立されたと思われる。昭和25年の『生命』9号には本城千代子を総裁とし、会長に酒井俊二郎（富山県小矢部市、酒造業）、顧問幣原喜重郎（衆議院議長）、曄道文芸（法学博士）、長田幹彦（小説家）、大木惇夫（詩人）が就任しており、その下に事務局、企画部、調査部、伝道部、会員部、各地支部がつくられている。真理実行会が全国的な拡がりを持つに至ってきていることを示している。そしてこの顧問の1人長田幹彦の紹介により、昭和27年には心霊研究で活躍していた小田秀人が参画し、外部の人々との関係がつくられていく。また昭和27年には名誉総裁として久邇朝融を仰えたことにより、より地方の有力者との結びつきを強めるにいたった。昭和27年段階では、東京以外は教勢は北陸地方に限られていた。それが28年には静岡県本部、奈良県本部ができ、北海道へも教勢が伸びた。さらに29年には大阪、30年には兵庫、32年には広島へと拡大していった。そして支部数も、昭和27年には4支部であったのが、28年には10支部、29年には11支部、30年19支部、31年21支部、32年22支部と急激に増大している。特に静岡県下で5支部が結成されており、地方の中心的拠点となった。

このような教勢の地域的拡大に伴ない、本城千代子は毎月各支部を廻ってい

る。それは非常にハードなスケジュールで行なわれた。例えば昭和30年4月を例にとると、以下のようである。(『生命』49, 昭30「本支部消息」)

4. 1. 例祭。講話は小田氏 (小田秀人)
3. 伏木支部座談会へ本城先生, 本吉氏 (本吉忠雄)
6. 先生御上京, 東京支部座談会へ。
7. 午前10時, 先生は東京婦人会館で安井英二氏と会談。11時音羽の鳩山氏邸で鳩山夫人と約1時間会談後総理とも御会見。正午から工業クラブで第3回同志会 (敬神同志会)。遠藤, 八田, 作田, 大島各氏のほか工藤, 高木, 大蔵, 安藤, 松田, 神田氏ら16名参会。4時半の湘南電車で静岡へ。夜静岡支部座談会。
8. 午前は吉田川尻 (吉田町), 午後島田 (市), 森 (周智郡森町) の各支部で座談会。先生お忙しい日程ながらお元気で巡回さる。随行戸水氏。
9. 浜松支部座談会に御出席。
12. 金沢市島田方の座談会に先生御出席。
13. 武生支部 (福井県) 座談会へ御出張。
15. 金沢市内渡辺方座談会に先生御出席。
16. 高岡支部座談会へ先生御出張。本吉氏随行。
18. 例祭。講話は前日着任したばかりの山中氏。本日より22日まで真理実行講習会。
20. 羽咋支部 (石川県) 座談会へ先生御出張。戸水氏随行。
21. 富山支部座談会に先生御出張。戸水氏随行。
23. 福井支部座談会に先生。本吉氏随行。
- 24~26. 奈良, 大阪, 宝塚の各支部を先生巡回講話。

このようなスケジュールは昭和27年より, 本城千代子が病気で倒れた昭和32年6月まで続けられている。本城千代子を仰えた支部では, 活発な座談会が開かれている。例えば当時支部活動が盛んであった静岡県下を例にとると以下のようである。(『生命』39, 昭29)

6. 8. 静岡座談会。お手数, 田尻 (吉田町川尻) 方面より多数参加。夕刻浜

松着、夜の座談会は体験談にはじまる。吉田会長、野中、小野、其他の諸氏の感激談あって先生の御講話、質疑応答も盛んであった。お手かずの終わったのは11時過ぎ。

ここに窺えるように、本城千代子によって授けられる「お手数」を求めて、多くの信者が参加している。そして真理実行会は「お手数」信仰であるという認識さえもつに至った。

こうした教勢の伸張とともに、真理実行会が結成当初より掲げていた忠、孝、敬神、崇祖の四大道の実践生活を社会に拡大していくという道徳生活運動、新日本建設運動も活発に展開されていくようになる。これは結成当初においては、敗戦後のアノミー状況のなかで、青年層を中心にして生きがい提示の役割を果たしていった。例えば結成以前より本城千代子の教えに影響を受け、宗教展などでも活躍し、さらに結成後は青年部長となり、会のために献身的に活動した北海道大学卒本吉忠雄は以下のように述べている。

興亡を賭しての戦争に身的にして勇躍出陣した青年と敗戦後全く希望をなくし、進むべき目標を失い、心の暗さは本能的享楽のみに走り、次第に悪の道にふみ入りつつある青年と比較する時、敗戦の大転機における当然の結果とはいえず、余りの変り方に慨歎せざるを得ないのであります。なぜこうも悲しむべき運命を作ってゆかねばならないのでしょうか。世の中のいわゆる先輩達が今日まで「理想をもて!」「希望をいだけ!」真の自由とはと、さかんに説いてきた、そして今も説くがはたして私達青年の心にどれだけの光明をなげかけたのでしょうか。本城先生は私達青年の暗く重い心に光明を見出させるには理論ではなく情熱と実践とによってのみ可能である、この力はわれわれを生かされている元の力におすがりする以外に絶対に道はない、換言すれば真行の外にないと説かれるのであります。先生を師と仰ぐ私達は日本の将来を背負ってゆく重大な使命をもつ青年が、1人でも多く、大宇宙の神に通じておられ、その力を存分に示されるよう先生の下へ参加するよう導くべきであると確信いたします。(『真理実行会報』3号、昭23.8)

このような意識をもった青年層の参加は多かったと思われる。結成当初より青

年部が造られ、また当時の唯一の会報であった『真理実行会報』も青年部の責任で発行されていることから推定できる。このような生きがい模索と社会的運動志向はその後も受けつがれていった。昭和31年11月1日に真理実行会総務部によって会員を洩なく調査した結果が『生命』60号（昭和31）に載せられている。サンプル数は不明で、全てパーセントで出されているために正確な実数では把握できないが一定の傾向は示されている。入会動機のうち真理探求が14%、真理実行会の趣旨および運動に賛同してが15%で、両者合せて29%と最も多い。次いで病気が26%、家庭のなやみ16%、生活実践のなやみが8%、職業事業上の相談が8%となっている。新宗教への入会動機は一般に貧病争が多いといわれているが、真理実行会の場合には必ずしも妥当しない。立正佼成会で昭和27年に報告されている結果では病気が68%、素行不良16%、家庭の悩み6%、不運6%、失業2%、孤独1%、何んとなく1%となっている⁽¹²⁾。この場合には貧病争が入会動機であるということは妥当する。この違いは宗教運動の違いの帰結であるといえよう。すなわち真理実行会においては「お手数」の秘儀により貧病争からの解決という側面と、もうひとつは道德生活運動の側面をもち、後者がたてまえとしてより強調されていたからである⁽¹³⁾。

対社会的な道德生活運動、新日本建設運動、敗戦後には平和運動に取り組んでいった。とくに政財界の有力者と接触し、こうした運動を拡めようとしていた。この傾向はすでに戦前においても小磯総理大臣を訪問しており、敗戦後は幣原喜重郎、一条実孝、GHQなどを訪ずれている。しかし、これらは本城千代子の個人的営みであった。

それが運動として展開されたのは、心霊研究で有名であった小田秀人が参画するようになった昭和27年からである。彼の紹介によってより幅広い運動が可能になっていったといえる。勿論、教勢の伸張がそうした運動へ駆り立てることを可能にしたのはいうまでもない。昭和26年には平和の歌を朝日新聞、読売新聞の全国版で募集したり、海外向けの雑誌「コスモス」を英文で発行し、20数カ国の宗教団体、平和運動家に配布している。

そして、昭和30年には中央政財界の神経中枢に教えを広める目的で外郭団体

として敬神同志会を結成している。そして、第1回の会合は、主催者として真理実行会東京会長であり、内閣書記局長遠藤柳作、元鉄道大臣八田嘉明氏がなっており、参加者は元公爵一条実孝、新日本窒素社長白石宗城、同副社長大石武夫、元文部政務次官作田高太郎、国土開発社長高木陸郎、秋島建設副社長大島豊、世界紅卍字会代表林出賢次郎、富士鉄工社長鈴木一郎など政財界の有力者が参加している。参加者側の本城千代子に対する要望は、世界情勢の不安、台湾方面の緊張、国内政局の不安定、経済不況などについて神霊界からの見通しを求めたものであった。これに対して、本城千代子は道義の確立が先決であると述べている。この第1回の会合は参加者が興味本位であったために、相互に不満であったと『真理実行会ニュース』（昭30.1.1）は伝えている。これ以降昭和32年までほぼ毎月開かれている。

こうした道徳生活運動、新日本建設運動は、一方では「我をとる」、忠、孝、敬神、崇祖というように、社会的規範の統合強化を果たすとともに、その目標は「常に神を祭り、神の御心とする絶対無私の政治を祖先伝来の指導原理としていられる天皇と——天皇を通して神を見、神に伝えまつる絶対無私の奉仕生活を以て、また先祖伝来の指導原理として来た国民との総合調和の理想」（『生命』26、昭27）とするものであった。それゆえに政財界人との結びつきが容易であったのではないだろうか。しかし、それは「お手数」を求めて本城千代子のもとに集まる人々の苦悩とは調和しがたいものといえよう。

以上真理実行会は宗教運動としては3つの側面をもっていたといえる。まず第1に、本城千代子によって授けられる秘儀「お手数」によって貧病争などの苦悩からの救済を求めようとする運動である。それはカリスマの証しであり、本城千代子に対してカリスマとして帰依する源泉であるとともに、直接的に苦悩からの救済を施すがゆえに、最も受容されやすいものである。第2に敗戦後のアノミー状況のなかで、四大道の実践ということによって生きがいを獲得せんとするものである。これは当時の青年層などに受け入れられやすく、事実献身的に会のために貢献する会員を生みだしている。第3に道徳生活運動、新日本建設運動、あるいは平和運動の推進の動きである。これは第2の側面をより

展開させようとした帰結といえよう。そして、第1の「お手数」を求める運動がカリスマ的霊能力を不可欠とするものに対し、第2、第3の運動においては、カリスマ保持者としての教祖は世界観の提示者にすぎない。

III カリスマの死

本城千代子は昭和32年9月に56歳で突然昇天した。真理実行会にとっては会の発展途上にあったがゆえに大きな衝撃であった。ここでは教祖の死を教団としていかに意味づけていったのか、さらに教祖の死によって教祖がどのように抽象化、神格化が推し進められていったか、および、後継者選定をめぐる問題を宗教運動との関わりで考察することにしたい。

本城千代子は昭和32年6月より病気になる、入院した。当時は会の発展期であり、さらに昭和24年に建設された神殿が狭くなったために、昭和31年より新神殿を建設する計画が具体化したばかりであり、大きな痛手であった。この本城千代子の病気に対して、「今般の御不快は神のみしらせ——御警告である」と真理実行会では意味づけている。

あまたの反省ごんげの足りない人々に対する無理なお手数によって、その因縁の強烈な余波が先生に反撥して来たことはいまでもあるまい。また純肉体的にみれば先生の肉体的、精神的過労の結果の集積であろう。(『生命』75号、昭32)

そして、1. 総ごんげ、御平癒祈願、2. 新神殿会館建設に勇往邁進する、3. 四大道なかんずく忠の思想の宣布、実践に焦点をおいて、超宗教的国民運動を展開する、という三点にわたる申し合せをしている。ここには救済のために信者の苦悩、さらには宗教運動の苦悩を背い込む存在としての教祖の性格が窺えるといえよう。

さらに本城千代子の昇天に遭遇し、その合理的説明が企てられる。すなわち、肉体をもった存在としての本城千代子と、「天の声を聞き、大自然の意志に感応して、又大義親する底の否、鬼神をも避しめるばかり」の神の人本城千代子が同居しており、物質的存在であった本城千代子が亡くなり、神の人本城

千代子は永遠に実在し、会員を見守り、監視し、指導する存在であるという説明が行なわれていく。(『生命』78, 昭32) 教祖の抽象化と神格化が企てられているといえよう。

この抽象化、神格化は真理実行会がカリスマ的質資の保持者本城千代子を統合の中心にし、それへの帰依によって教団が形成され、永続的運動体として継承されていくためには不可欠なものであるといえよう。本城千代子が昇天して1カ月後に開かれた全国支部長会議で次のことが決められている。(『真理実行会ニュース』昭32.11.1)

一 一般方針

- イ 本城総裁御昇天後といえどもあくまで、本会は前進し、世界平和実現に努力する。
- ロ 本会の創立者、本城総裁とその遺徳および本会創業の精神を尊重する。
- ハ 本会は宗教創業の団体にあらずして、財団法人として維持する。
- ニ 故本城総裁の立場と後任者問題については慎重にとりあつかう。

二 宣布運動について

- イ 教化活動に関しては本会綱領に明示された線にそうこと。
 - a 四大道実践、道義高揚、人心救済、社会浄化、世界平和を最前線に打ちだして講演会、座談会、その他あらゆる方法を講じる積極的活動をする。

(以下略)

(提案議案)

一 故本城総裁の呼び名とお墓の名称について。

- イ 呼び名…「本城先生」と決定
- ロ お墓の名称…「お墓」と決定

(以下略)

ここでは従来運動を継承、発展させていくこと、後継者の問題は慎重に取り扱うこと、墓地建設が決められている。この墓地は昭和33年3月に神殿会館の

裏山に建立された。そして墓前で総決起の誓いを行なうとか、個人的祈願を行なっている。さらに、年忌祭、祥月命日祭が執行されている。また伝記編纂も試みられている。しかし、教義の整備、体系化にまでは至っていない。それは後継者の選定が大きな問題となっていったからである。

次に後継者選出について考察することにした。前述の資料にもあるように、本城千代子が昇天して直ちに後継者が決らなく、慎重に取り扱おうと全国支部長会議で決めている。本城千代子には22歳の時に生まれた長男がいた。しかしこの長男を本城千代子は生前に後継者として指名していなく、又真理実行会の指導者の1人には長男では継げないといっていたといわれている。(K氏談)そして『真理実行会ニュース』(昭32.12.1)において「総裁の跡を継ぐもの」という論壇が載せられている。そこで真理実行会の後継者は道の「祖述者」と組織運営の中心人物が要望されると述べ、次いで後継者の具体像について以下のように主張している。

故本城総裁の後継者に擬せられている人は、多分に女史のよき遺伝の継承者であり、霊的にも、また識見、力量においても、その天賦の素質は十分であろうと思われるが、その天性を磨き素質を100%発揮しうるか否かは、一に今後の覚悟と精進いかに懸っていること、もちろんである。(中略)どうか女史の後継者たらん人は、故人の遺徳と威光に便乗することなく、自らの苦心と努力によって、その遺された教えを再検討し、遺された道を一步一步踏みしめて真理のあかしを立て、花と散って行かれた故人の実を、確実に結ばせて頂きたいものと、切に切に、祈って歩まないものである。先生のお言葉にいわく、「我」は心の大適である。口でいうことを実行せよ。実行なきところに成就なし。

ここでのよき遺伝の継承者とは長男であると推測できるが、ここで窺えるように真理実行会としての後継者、運動のリーダーとして必ずしも一致して長男を押ししていくことにはなっていなかったと考えられる。そしてこれ以降後継者の選出がめぐって真理実行会は危機的な状況をむかえる。それは宗教運動としていかなる展開を志向していくかと深く係わって生じたものである。

前述したように宗教運動体としての真理実行会は単一の性格をもっているものではなかった。そのひとつの性格はカリスマの証しとしての秘儀「お手数」によって救済を獲得せんとする宗教運動である。

真理実行会といえば本城先生、本城先生といえばお手数——従って実行会といえばお手数、という具合にいわゆる三段論法で実行会を見ている人が多く、またそう理解している会員も多かったように見受けられる。この論法でゆくと、本城先生が亡くなられたからお手数がない；お手数がないから従って真理実行会もなくなるであろう、ということになる。事実、葬儀に会葬した会員の中にさえ、もうこれで実行会もおしまいかと思っ参りました、と正直に告白する向きも少なくなく、われわれをあ然たらしめたものである。

（『生命』78，昭32）

この「お手数」は真理実行会会員個々人の因縁の精算であると受けとめられていたがゆえに、真理実行会の存続の運命を決めるほどに重大なものであったと考えられよう。すなわち、「お手数」が神の使徒と承認されている本城千代子によって唯一授けることのできるという側面にこそ、真理実行会の独自性を保持できる、いわば他の宗教運動との境界維持を明確にするものであったからである。

この「お手数」を本城千代子の昇天に遭遇することによって、次のような合理化が企てられている。「お手数が先生のもと思うところに錯覚の出発点がある。お手数は神様がされるのである。先生の清浄無垢な真空管を使って、神が直接に作用された」のであるから、本城千代子の昇天後は、神の器として真理実行をすることにより、因縁は除かれ、使命は達成できる。（『生命』78，昭32）すなわち、神の究極的な意図は、四大道の実践という神の遺業を継ぎ、神の恵みを全人類に行きわたらせるために、各人が神の使徒をして働かねばならないと、合理化が企てられている。

こうした企ては、本城千代子の教えを人心救済、新日本建設に貢献するという道徳生活運動、新日本建設運動を推進していくことが、今後の方向であるという人々によって打ち出されてくる。その代表的な主張者は小田秀人である。

小田秀人は真理実行会に参画した動機を次のように述べている。

私は既成、新興の別なく苟くも宗教と名のつくものに参加することは、気分の上からも原理上からも一切御免を蒙むことにしていることは御存じの通りです。本城女史が内外各方面からの執拗な要望を斥けて、断乎文化団体として、財団法人の立場を堅持して居られることは、私の最も意を強うする所で、之が、私が参加を決意した直接の動機という事が出来ます。という事は、この文化団体として初志を飽く迄貫徹されるその意気込みの中に、神霊の意志を最も尊重される神第一主義の信念を感じし得ると共に、その信念の基盤となっている思想体系そのものが、たといその表現に於ていかに簡素であろうとも、其骨組に於て健全且つ雄渾であることを実証していると思うからであります。⁽¹²⁾

そして神霊の意志と、その思想を拓めんために、中央政財界人との橋渡しを行ない、また機関誌『生命』を主宰するなど積極的に真理実行会にコミットメントしていった。彼が『生命』(107号、昭35)に「真理実行会の再建と、本城先生御教訓の回顧」と題して以下のように主張している。

真理実行会の使命は、各自が神の存在を明らかにして足元の真行にいそしむとともに、全世界津々浦々にいたるまで神の道を伝え、人心を救済して国家社会に貢献するという積極的行動に移るにある。それでこそ真行は社会性を持たせることになる。(中略)本城先生の御活動には明らかに二つの面があった。一つには真理実行の宗教面の伝導。そして他の一面には敬神同志会という、対社会的活動。ところが先生御昇天後、とくに第二の面がおろそかになっているのではないかと危ぶまれるふしがないでもない。(中略)敬神同志会的役割も今後企画の重要な一翼に加えて、神の御経綸と、先生の御負託に応じて頂きたいものである。

こうした道徳生活運動、新日本建設運動を積極的に推進するべきであるという主張は、本城千代子の昇天直後から、真理実行会内でも行なわれている。すなわち、真理実行会のあり方は、「一宗教団体を育成することが目的ではなく、神を無視し真理を歪めた世界観、人生観、社会観を是正して、正しき生活、真

理に即した国家神意を顕現する人類社会を建設する人材を造り、その目的を実現することに一切の焦点をおくべきである」(『真理実行会ニュース』昭33.4.1)と主張されている。

こうした主張が行なわれる底流には、本城千代子によって授けられた「お手数」は、神の「みわざ」の証しであり、それは神の使徒本城千代子によってのみ可能であり、この側面での継承は不可能であるという認識から生まれたものである。

しかし、道徳生活運動、新日本建設運動に運動を限定していくことは、ひとつには他の社会運動との境界領域を不明確にしていくといえよう。さらに、カリスマの証しである「お手数」を求めて真理実行会に参加した層の欲求充足を満さなくなることになる。こうして後継者選出問題をめぐって生じた真理実行会の混乱は「虚脱状態」に至ったといわれるほどに、危機的状況におちいっていった。

あ と が き

故本城千代子の後継者として選出されたのは、本城千代子が真理実行会を開いた頃から、身の回りを世話していた妹直野正子である。後継者として会員から認定されたのは本城千代子昇天後約4年近く経た昭和36年3月である。その時の『生命』(114号、昭36)の記事では、「聖山に瑞気満ち感激堂に溢れる——直野先生はじめてお洗米とお手数——」と題して、新しい展望が開かれていったことを感激をもって伝えている。そして、昭和36年1月13日付で、宗教法人真理実行教として新たに宗教法人規則を公示し、新しい組織への脱皮が試みられた。直野正子は「お手数」の授けることの霊能力の保持している者として後継者に選ばれ、「お手数」運動を志向する側面が宗教運動として継承されていた。財団法人真理実行会の後継者としての総裁に就任するのはそれから1年半後の昭和37年8月のことである。その後も宗教法人真理実行教と財団法人真理実行会の両組織間の調整が進まず、昭和38年1月には、第3の転機、第3の生れ替りとして、直野正子によって「真理実行の教」が立教宣言され、今日に

至っている。この間の経過とその後の展開については別稿に譲ることにした
い。

ともあれ、真理実行会の場合、霊能力の啓示としての「お手数」によって帰
依者を獲得した宗教運動である。この霊能力そのものは個に属するカリスマ的
資質であるがゆえに、後継者の正当性は常に危機にさらされるといえよう。し
かも、宗教運動として多面的な性格をもっていたがゆえに、この後継者選出を
めぐっての混乱は増大したといえる。

注

- (1) Weber, M, *Wirtschaft und Gesellschaft* (世良晃志郎訳『支配の諸類型』創文社, 1970)
- (2) Weber, M. 前掲書。
- (3) この研究は文部省科学研究費総合研究(A)の交付をうけ、東京大学田丸徳善先生を代表者とし、「現代宗教の動態に関する総合的研究」の一環として継続中のものの成果の一部である。なお真理実行会の研究は対馬路人氏と共同で行なっている。
- (4) 対馬路人「松下祖神道における生命の系譜論」(『日本仏教』53号, 1981年1月発行予定)に松下祖神道の分析が行なわれている。
- (5) 真理実行会編集部『神の使徒 本城千代子女史』真理実行会, 昭22。
- (6) 真理実行会編集部, 前掲書。
- (7) 宗教を生活の指導原理として、いわば脱宗教化を試みている。裏をかえせば、生活の全領域を宗教化していることといえる。こうした特質は、日本の新宗教にかなりみられるものである。
- (8) 真理実行会編集部『真理実行への道』東京出版株式会社北陸支社, 昭24。
- (9) 対馬路人, 前掲論文。
- (10) 真理実行会編集部『真理実行への道』
- (11) 真理実行会編集部『真理実行への道』。この「お手数」の他に、「御神紙」といって、半紙に本城千代子が神の気を入れるとして「お手数」をしたものを、小さく切り、それを患部にはると治癒すると信じられている秘儀もある。
- (12) 鶴藤幾太編『立正佼成会の信仰』呉竹書院, 昭29。
- (13) その他に、道德生活運動に賛同し会員に比較的上層、インテリ層が多かったことにもよると考えられる。
- (14) 小田秀人『山上の清水』真理実行会, 昭27。

(この研究を行なうにあたって、教団関係者から資料提供をうけた。)
教団関係者に深謝します。